

山縣有朋の国葬に関する新聞記事について

小林 道彦

一九二二年（大正十一）二月九日、東京日比谷公園で元老山縣有朋の国葬が営まれた。今回この誌面をお借りして、関連の新聞記事を紹介することを思い立ったのは、昨今の国葬論議に触発されたからではなく、たまたま、現在私どもが行っている共同研究¹が佳境を迎えつつあり、その関係で山縣の国葬について調べていたところ、興味深い新聞記事に遭遇したという偶然の一致によるものである。

山縣についての一般的イメージの祖型は、岡義武「山縣有朋―明治日本の象徴―」（岩波新書、一九五八年。二〇一九年に岩波文庫として再刊行）に求められよう。岡氏はこの書物の中で、山縣とその官僚閥を「〔明治〕維新以来築き上げられて来た盤石の如き天皇制」の上に聳え立つ巨大な「中央山脈」になぞらえ、その強大な権力を、そして、「支配機構」の掌握に指向された強烈な権力意志のあり方を、それぞれ見事に描き出している。

彼の権力意志はやがて「宮中某重大事件」（皇太子〔後の昭和天皇〕婚約破棄問題）の一因となり、最晩年の日々を押し揺るがした。そして、原敬暗殺（一九二一年十一月四日）に衝撃を受けた山縣は、その日を境に病の床に就き、結局二度と起てなかつたのである。翌一九二二年二月一日、彼は神奈川県小田原市郊外の私邸「古稀庵」で静かに息を引き取った。享年八十三歳であった。

山縣の国葬について、岡氏は非常に興味深いエピソードを「東京日日新聞」から引いている。国葬への参列者は意外と少なく、「幄舎（テント）」の中はガランドウの寂しさ²であり、「上下両院議員はホンの数へるばかり、実業家の

¹ 科研費基盤研究（B）一般課題番号20H01312「第一次世界大戦における『模範国ドイツ』崩壊の日本に及ぼした影響の政治外交史的研究」。

顔は松方五郎君位のもので、他は見かけない。一番端の〔東京〕府市名誉職の席も空々寂々で、武と文の大粒なところと軍人の群れで、国葬らしい気分は少しもせず、全く官葬か軍葬の観がある。〔沿道には弔旗を掲げた家は少なく、掲げてあるとかえって目につく位〕であり、「国葬というのに民衆の中には喪章をつけているものはほとんどなかった」と続けている（文庫版二四三頁）。

山縣にとつて民衆とは支配の客体に外ならず、彼の権力意志は「支配機構」の掌握に向けられていた。彼は民衆を見捨てていたのであり、それゆえに民衆もまた彼を見捨てていた（二四四頁）。国葬が閑散をきわめていたことは、その象徴的な現われであった。

以上は岡「山県有朋」のもつとも印象的な叙述の一つであり、それは深い余韻を伴いながら読者の心に沈殿している。まさに名著の名著たる所以である。現在に至るまでの山縣有朋研究は多かれ少なかれ、こうした「民衆に見捨てられた」「寂しく孤独な権力者」というイメージを暗黙の前提として、その克服や修正を試みようとして来たように思われる²。

ところが今回、山縣の国葬に関する新聞記事を改めて通覧したところ、意外な記事が目飛び込んできた。たしかに輿舎の中はガランドウであったが、会場の外には溢れんばかりの群衆が押し寄せており、警官はその規制に大わらわであったというのである。もちろん、このことをもって山縣には大衆的人気があったなどと強弁するつもりはない。数週間前に執り行なわれた大隈重信の「国民葬」には、山縣に倍する人々が押し寄せていたのであり、それは「大衆政治家」大隈のイメージにふさわしいものであった。

岡氏も指摘されているように、人々の多くは喪章を付けていなかったし、そもそもこの頃の東京では、大衆はことあるごとに街頭に繰り出し、国家公認の、あるいは非公認・非合法の「祝祭的空間を楽しむ」という傾向が露わになっていた³。帝国憲法発布の祝典（一八八九年）から日比谷焼打ち事件（一九〇五年）、さらには「最後の將軍」徳川

² 例えば、伊藤之雄『山県有朋―愚直な権力者の生涯―』（文春新書、二〇〇九年）など。

³ 大逆事件に関する叙述に注目が集まりがちであるが、永井荷風『花火』は「東京」における大衆の登場を、各種祝祭空間との関係で論じた記録文学の嚆矢でもあろう（永井荷風『花火・来訪者』岩波文庫、二〇一九年）。

慶喜の葬儀（一九一三年十一月）に至るまで、慶事・凶事に関係なく人々は街頭に溢れ出ていた⁴。山縣の葬列を日比谷の街頭で見送った人々の多くが喪章を付けていなくとも、それはなんら怪しむに足らないのである。

ちなみに、幄舎の中が「ガランドウ」になったのは、山縣の人望の乏しさによるというよりも、国葬のドレスコードが厳密を極めていたからである。「大礼服及び燕尾服の外はフロックコートですら参加不許可」とされ、「故公の恩顧の高級將軍の中にすらも、些か服装の規定に反したために入場を拒絶されたものがあつた」⁵。そうであり、折角、帝国議會で国葬を協賛したのに、燕尾服を持たない代議士は入場を許されなかつたのである（内田魯庵「服装差別待遇の撤回」、「太陽」一九二二年三月号）。ましてや、「一般国民」においてをや。このドレスコード問題は、小論で紹介した新聞記事の中にも顔を出している（「史料二」貴議院議員田所美治の記事、「史料四」）。

それからもう一つ、当日朝方に雨が降ったことにより、幄舎内部の椅子が濡れていたことも着席を控えさせた要因になつたと思われる（史料二・三「雨に濡れた潔白な腰掛はガラ空きであつた」）。ちなみに、岡氏が引用されているのは史料四であるが、これは「三日月生」なるペンネームのライターによるものであり、「山縣公のお葬儀に私も参列するの記」というタイトルが示しているように、個人としての参加記であり、「官僚政治」に対する批判的観点が前面に打ち出されている。それゆえに、葬儀に参列した人々の生の声や挙措なども生き生きと描き出されており、他の記事に比べて一際異彩を放っている。だがその反面、会場外に押し寄せた大群衆に関する叙述は全くない。この記事にはかなり露骨な政治的バイアスが加わっていたと見てよいだろう。

山縣は近世身分制社会に生を享け、卒族の身でありながら、ついには元老筆頭にまで上りつめた「立志伝中の人物」である。だが、彼が亡くなった時、すでに日本にも都市的大衆社会は形成されつつあり、晩年の山縣は大衆的政治運

⁴ 一九三六年の二・二六事件に際しても、当初は大勢の「弥次馬」が溜池、虎ノ門、お濠端、銀座、内幸町界限に押し寄せており、そうした群衆目当ての夜店まで軒を連ねる有様であつた。（永井荷風「断腸亭日乗」上巻、岩波文庫、一九八七年、一九三六年二月二十七日の条）。

⁵ 「ドレスコード問題」の所在を最初に指摘したのは、小山直子「フロックコートと羽織袴―礼装規範の形成と近代日本」（勁草書房、二〇一六年）二二八―二三〇頁である。これは「日本政治史研究」から見ても画期的発見であつた。

動に対する警戒感を露わにしていた。

ここに興味深いエピソードがある。それは山縣国葬のわずか二日後には、葬儀が行われた日比谷公園も、遺骸が葬られた護国寺（現、文京区音羽。大隈もここに葬られている）も、いずれも大衆的示威運動の舞台になっているという事実である。

二月十一日の紀元節当日、護国寺前の広場には午前中から官業労働者が集結し、「女工」（女性労働者）を陣頭に立てて「失業防止大示威運動」、つまりはデモンストレーションを行っている。これには大阪や八幡（現、北九州市）の労働団体も参加しており、彼らは飛鳥山（現、北区飛鳥山）―洪沢栄一の本宅がある―まで行進し、そこで解散している。

さらに午後一時、芝公園（現、港区）大隈侯銅像前に集まった「第二回普選大会」のデモ隊約一万は、警官隊一〇〇〇名と小競り合いを演じながら、普選歌を高唱しつつ内幸町に向かい、そこで政友会の有力代議士で普選反対論者であった小川平吉邸に投石して、警官隊と衝突した（午後六時二十分）。その後、デモ隊は日比谷公園に入ろうとしたが、その半分は警官隊に押し戻され、都心の政党本部や新聞社を「歴訪」した後に、最後は二重橋前広場で「天皇陛下万歳」を三唱してようやく解散した。この間、「暴行や騒擾罪」で計十七名が検挙されている⁷。

国葬が執行された森厳な都市空間は、そのわずか二日後には大衆のエネルギーに充ち溢れた祝祭的空間と化していたのであった。ここに大正デモクラシー運動の力量の発露を見出すのか、それとも治安警察法体制の意外と寛容で柔軟な側面として評価するのか、論者によってそれはさまざまであろう。小論にはそれに答えるだけの準備はないが、このことだけは言えよう。大衆社会のパワーは、国家総動員を媒介とする軍人各層の政治参加を促すが、まさにそれこそは「政治的士族軍」の解体⇨徴兵制軍隊の建設を推進してきた山縣にとっては、本来の国軍のあり方からの逸脱

⁶ 言うまでもなく「普選」とは、普通選挙のことであり、二十五歳以上の成年男子に等しく選挙権を与えよという政治的・社会的運動を「普選運動」と称する。

⁷ 『東京日日新聞』一九二二年二月十二日第七面。

に外ならなかったということである⁸。

ともあれ、最早紙幅も尽きた。この問題についてはまた改めて論ずることにして、今回はここで稿を閉じることにした。

※

翻刻文には、適宜句読点を補って段落も変えた。見出しや小見出しはフォントを大きくしたが、読みやすさを優先して修正を加えなかった箇所もある。史料三には「参列順序」「勅旨御代拝」の記事も含まれているが、今回は収録を見合わせている。なお、本稿作成に当たっては、本学基盤教育センター准教授藤田俊氏に貴重なアドバイスを頂いた。ここに記して感謝の意を表する次第である。

史料一 「東京朝日新聞」 一九二二年二月十日（金） 夕刊二面

「春まだ浅い日比谷に 山縣公の国葬儀 奏楽の音哀しく厳かに執行」

元勲故山縣有朋公の国葬儀は、九日午前十時から春未だ浅い日比谷公園でいと莊嚴に執り行はれた。前日来の雨、暁近くに缺みて雲間を漏れる淡い射光は此処式場の正門を描く白木の大鳥居に映発して、清く敷き詰めた玉砂利も打湿り勝ちである。鯨幕で囲んだ大天幕張りの幄舎二棟長く両側に建て並べ、正面に建つ白木造りコケラ葺の齋場は同じく鯨幕で閉ざされ各宮家、國務大臣、枢密顧問官を始め二百余対の真榊、花環、花東は齋場の周囲を所狭きまでに

⁸ この件に関しては、小林道彦「書評・森靖夫著『国家総動員』の時代―比較の視座から―」（『史林』第一〇四卷六号、二〇二二年十一月）を参照されたい。

取り巻いて居る。

勅使黒田侍従、皇后宮御使 三條主事、東宮御使本多侍従閑院梨本、山階、華頂、各宮殿下、李王世子殿下を始め奉り、先着の文武百官は八時頃から大礼服の胸を輝かせて続々参入し、幄舎の内外に時ならぬ黄金の林を造る。結構の程誠に目覚しい極みである。午前九時半と覚しき頃、嚙唳たる海軍軍楽隊の奏楽が遙か正門の外から湧いて来た。

「気を付け」の喇叭が続いて起る。靈柩が斎場に着いたのである。雑色の持つ白旗八旒、鉾楯二対、両陛下、東宮、昌徳宮御下賜の御櫛大島齋主（大将）平田副齋主等を先頭に「議定官枢密院議長元帥陸軍大将従二位大勲位功一級公爵山縣有朋之柩」と書き流した一旒の銘旗と共に、靈柩は砲車の軋り静かに斎場幔門内に入った。道楽の音が一頻り流れる。正門の外では再び軍楽が湧く。参列者は齋しく襟を正して黙礼する。

薄鼠色の狩衣に白麻の肩衣を漬け藁沓、竹杖を持つた喪主伊三郎氏、黒の喪服を纏ふた同夫人、船越男夫人、狩衣姿の古口家令、正装の吉江副官等の近親家族席の間には、高須看護婦外三名の看護婦の打ち沈んだ顔も交る。清浦葬儀委員長、三土同副委員長、其他の委員、勅使、皇后宮御使、東宮御使、各皇族王族、皇族御使、大勲位、高橋首相以下各大臣、勲一等各国外大使公使以下参列諸員は宮中席次順序で着床すると、正十時斎場の幄門は再び奏楽裡に開かれた、打ち見れば正面に安置して浅黄色の布で覆はれた靈柩の上には、元帥陸軍大将の正装、軍帽軍刀を置き、其前には菊花章頸飾大勲位、菊花大綬章、勲一等旭日桐花大綬章、功一級金鷄勲章を始め、英国メリット勲章、仏国レジオールノール第一等勲章等、故元帥の遺勲を語り顔に飾られてある。其左右には聖上、皇后宮、東宮御下賜の真榊神々しく立つて居る。斯くて式は奏楽献饌の儀を以て始まり大島齋主恭しく神前に進み、悲痛の声調をこめて祭詞を朗読する。門外の儀杖隊は三度軍楽を奏し、殷々たる十九筈の弔砲、続いて葬場の空に鳴り渡る。平田副齋主代つて故公爵の偉蹟を頌し、勅使皇后宮、東宮、皇族、喪主の順で参列諸員一同拝礼、玉串を捧げ午前十一時滞りなく式を閉じた。

神道碑建設の御沙汰。伊、山両元勲に対して

維新創業の元勳として明治天皇から特に優詔を拝した毛利、島津、三條、岩倉、大久保、木戸、大原、廣澤諸卿に對しては、既に勅命に依り神道碑を建設せられたが、故伊藤博文公に對しては既に御内命もあり、山縣公に對しても

近く其の御沙汰があるやに承る。伊公のは大森谷垂に、山公のは音羽護国寺内に建設せられるであらうと。

兩元老の遙拝 令嗣を代理に

故山縣公の国葬には松方、西園寺兩元老も会葬の筈であつたが、兩元老とも所労で輒地療養の爲め、松方は特に嗣子巖氏を代理とし、又西候は嗣子八郎氏を代理として葬場に礼拝せしめ、自身は同時刻鎌倉及び興津で遙拝したと。

史料二 『東京朝日新聞』一九二二年二月十日（金） 夕刊二面

「綺羅星と並んで故公の最後を飾る 雨に濡れた幄舎に文武百官の国葬気分」

故山縣公の靈柩を載せた砲車……葬列が日比谷の葬場に着いたのは午前九時半であつた。式場に参列の文武百官は金モールも燕尾服も黒一色の喪章を帯びて、悲しみの目を心から迎へる。其式場に悲調の奏樂が参列者の胸を顫はして響いた。その時である、「勲一等……」式場係りの声が聞えて、高等官一等から公侯爵従二位錦鶏間祇候と宮中席次の爵位勲等が式場着席の順に呼び上げられた。「勅任扱外国人」此呼び声が聞えた時は参列者の間に「ブツ」と失笑が起つたそれは恰度悲しみの扉がパツと打開かれたやうで参列者の顔色も俄に打寬いで見えた。呼び声はそれほど時代を超越したものであつた。

劍把を握つて悠悠進んだのは井上元帥であつたが、貴議院議員田所美治氏は「古いやつを出して来た」と金モールの胸を叩いて進んだ。小さい横田長官が金モールに包まれたやうな矮躯を運ぶと燕尾服の木下鉄道勅参がその低い肩を撫でる。横田長官「国葬なればお先へ御免」と言つた調子が見えた。勅任待遇の高橋老婦長「斯う呼び出されてはね」と面恥さうに着席する。

オーバーの下に勲二等の綬を忍ばした下岡忠治氏までオーバーを脱ぎ兼ねて居は、四間に十八間の幄舎二棟は一万の参列者を入れる為に設けられたと云ふが、実際の数は二棟で一千にも満たず、雨に濡れた淨白の腰掛けはがり空で

あつた。と見る参列者の席は陸海軍諸星の綺羅美やかな礼装に埋まれて今日を盛りに軍国の花が一時に咲き揃つたやうだ。山梨陸相の肩に大将の章星が誠に悠然と誇らかに見える、

左側の最前列には東郷元帥が彼の深い沈黙の口を神経的に顫はして居る。高橋首相と内田外相、山本農相、床次内相等が相並んで静かに控えた後に、中橋文相は野田通相の太い頭の上に囁いては微笑して居る。祭壇で供饌の式が始まつても止めない。後藤市長も鼻眼鏡を大岡育造氏に向けては白い手袋の指で物真似をしながら話込んで居た。直ぐ後の加藤総裁は黙々として祭場から眼を離さない。山梨陸相が曾我子を顧みて囁いて居るのに引代へて、田中大将が太い唇を堅く結んで居るのが参列者の注意を集めた。

病褥の貞子未亡人 枕をもたげて別れの涙

山縣公国葬の日、貞子未亡人は去る一日の深夜小田原から公の遺骸を護つて帰京して以来、風邪の為め麹町五番町の自邸で病褥に就いた儘家人の看護を受けて居り、蔵相官邸へも家人を遣はして懇に別れを惜みただけであつた。

見当らぬ喪章 国葬としては珍らしい

沿道第一の人は内幸町の曲り角で帝国ホテル横に積まれた建築材料をい、足場にして「これやあよく見ねる」と得意がる不謹慎さ。勸銀横に掘られた大溝に渡された丸太が亘つてサンブとばかり泥水の中に落ち込む毒さ。夫にしても道路民衆中に喪章佩用者の殆んど見当らなかつたのは国葬として稀らしいことであつた。

入場券の三分一 許された一般参拝 予定を卅分早めて

伊三郎氏夫妻を初め近親達がしほしほと斎場を退くと直ぐ、予定の十二時を三十分早めて一般参拝を許した。一般と云つても特に山縣家から入場券を渡された向きばかりで、山縣公が狂介の昔から元帥と時めく迄の友達或は世話になつた人々、書生、下女すべて家の子郎党であつて、入場券は二千枚出したといふが地方にも互つて居る故もあらう、約七百人に過ぎなかつた。終りに小田原青年団の代表者も特に許されて参拝した。

靈柩葬場へ 黒布を纏うて棺側に 従ふ遺愛の軍馬 伊三郎氏の喪主姿

午前八時四十分——山縣公の靈柩は国葬事務所蔵相官邸の奥の間から近衛の卒十人の手で玄関に搬び出された。重い浅黄無地の綸子に被られた白木の靈柩の上には、公が一世の榮を語る元帥の大礼服と軍帽が朝曇りの中に鈍く光る。他何の裝飾もない。搬ばれた靈柩は静かにワニス塗りの真新しい砲車に遷される。そのあとに続いて奥元帥が暗然として出る。泣き出しさうな顔をした田中義一大将が礼帽を抱へて砲車の側に寄り添ふ。山梨陸相、島村、松川、加藤（定吉）、柴、川村、山下、有馬、大庭大島の各陸海軍大将が脱帽して階段を下りる。清浦枢密院議長、有松、一木、井上（勝之助）曾我各枢密顧問、西園寺、下條式部官が続く。何れも最高の金ビカ大礼服である。五十分、靈柩を載せた砲車は前後二十二人の兵卒が黒房の綱を執つて静々と軋り出す。砲車の前には黒布を纏はせた公が遺愛の軍馬が、今は亡き主の最後の門出に従ふのも哀れ深い。折柄参謀本部前で打ち出す十九発の甲砲が殷々と響き渡り、官邸の側からは軍樂隊の哀の曲が歎歎くやうに流れて来る。病余の体を狩衣姿に、悄然とした嗣子伊三郎氏の藁沓の足どりも重く、官邸の塀に沿うて居並んだ山縣家の家従、召使達の喪服姿に打萎れた様も人目を惹いた。斯くて靈柩は数十旒の銘旗、御下賜の真榊、数多くの勲章を捧げた前後を陸海軍の儀仗兵に衛られて日比谷の葬場へと向つた。是より先、蔵相官邸は午前七時に行ふ発柩祭の準備に大島、平田正副齋主を初め葬儀委員は、未明の頃から参集して靈前に型の如く祭文を白し、午前八時前後に棺側侍列の元帥、大将、顧問官が自動車を乗つけ一てしきり忙しく準備に従つてゐた。

儀仗隊物々しく 白丁姿の小田原青年団が真榊を捧げて

大蔵大臣官邸から霞ヶ関外務省角を右に曲り、更に左折して齋場に達する沿道は、儀仗兵がぎつしりと隙間なく堵列し、外務省傍には士官学校幼年学校生徒が行儀よく並んだ。送葬の民衆は早朝から昨夜の雨の泥濘を物ともせず続々と集まつて来る。警官は声を嗶して忙がしげに整理する。独逸大使館の門前に控へた館員の間にゾルフ大使の令息令嬢が物珍らしげに眼を腫つて居る。朝来晴るかと思へば曇り、曇るかと思へば雲が切れて、如月の悲しげな薄い光が空中に降りかゝる。かくて九時五分、葬列の先駆は外務省の角を曲つて現れた。軍樂隊の奏する「哀の曲」の旋律は徐るに涙を唆り、喇叭手の吹く哀調は今更に故人の面影を偲ばせる。両陛下東宮殿下の御神は小田原青年団が白丁姿

で静々と捧げる。陸海軍将校の捧持した勳章は燦然と輝く。次で靈柩は奥、川村両元帥、田中大将等に護られ、肅々と霞が関の坂を下つて来る。泥濘の道を軋る柩車の轍の音は重く右側の最先に侍した田中大将は、頭を左右に振つたり仰いだり俯いたり感慨無量の体で黙々と歩を運ぶ。次の会葬者に交つて外務武官の服装が一層人目を引き、大井、西川両陸軍の指揮刀も光つて、九時廿五分葬列は外務省角を過ぎ斎場に向つた。

閑散な浅草公園 吉原も歌舞音曲は遠慮

今日は山公園葬儀当日なので、浅草公園の諸興行物は警視庁の寛大な申渡しに依つて、午前中だけ敬意を表して興行を遠慮したので、公演は至極閑散であつた。午後は平素と変わりなく開演し、尚近々のうち各活動写真館で国葬の光景を映す筈である。又吉原遊郭は三業組合で協議の結果、今日一日歌舞音曲を遠慮する事となつた。因に今日市内各小学校に於ては生徒を集めて、校長から故山縣公生前の勲功に付き講話する所があつた。

葬場外の雑沓 声を囁らした警官 雪崩を打つ電車通

懸念された雨はカラツリと晴れた日比谷の周囲には、泥濘の中を数百の警官が引切なしに動いてゐる。其の間を馬上高く指揮官が疾駆し何やら盛んに指図する。今日の国葬儀の警戒である。愛国生命前から内幸町停留所に至る両側は大縄で仕切り群衆の溢れるのを防いでゐる。公を偲ぶ人、今日の国葬儀を見落すまいとの数知れぬ群衆が盛に電車から吐き出され公園の周りに蝟集する。それが八時頃だ、鯨幕の幕舎の設けられた幸門には多数の憲兵、警官が参列者外には一人も入れまいと睨んでゐる。群衆は刻々日比谷を取囲いて、交叉点から内幸町の両側はギッシリと詰寄せで、もう押すな押すな混雑だ。内幸町より外務省に通ずる大道路は輻重、砲兵、歩兵の約一個大隊が右側に、海軍が左側に整然と堵列し、司法省裏通りには道一杯に自動車置かれてある。斯うした騒々しい群衆の中を消魂しい爆音を立て、自動車疾駆し、大礼服美しい文武官が会場内に消えて行く。靈柩出発間近の九時前十分もう幸町附近の混雑は名伏し難く、嗷声の警官が「押してはいけない、いけない」と懸命に怒鳴り、忽ち警官の人垣が作られる。工事中の帝国ホテルの柵に攀ち登る人、「帽子を取つて下さい」と叫ぶ人「押すのは誰だ」と警官はもう血眼だ。「誰

だと名乗る馬鹿があるか」と怒鳴り返すのもある。婦人連は金切り声だ。かくて九時電車はバット止まつた。静まり返つた群衆は今か今かと霊柩の到着を待つ。折しも楽の音悲しく、近衛騎兵徒歩の儀仗が到着する。群衆の中から「脱帽」と云ふ声がある。幸町の堵列隊からの哀愁籠つた喇叭は悲しく人の胸を刺し、群衆は均しく頭を垂れる。三十分余る葬列が公園内に消えるや、群衆はドット電車通りに溢れた。スワ大変と警官が右往左往して制止する。「あちらから、あちらから」後から後からと続く人波に電車も通りかねて大変な雑沓だ。一方警視庁前の濠端から大手町附近電車の両側には数万の群衆が刻々と増加し、午後一時の発柩を待つてゐる。日比谷交叉点では交通整理の警官が汗だけで手を揚げ下げしてゐた。

混雑加る 霊柩音羽へ

零時過ぎる頃から群衆は益加はり、内幸町から大手町に至る電車沿道はハチ切れさうになる。一時霊柩が幸門から出て来ると警官の制止も聞かばこそ、「見えない、見えない」と人波は電車道に溢れ出で、電車はしばし立往生となつた。

護国寺に埋葬 墓標高く立つは 暮靄深き午後七時

厳かな葬場祭終了後、約一時間半に亙つて一般の礼拝を許した後、午後一時霊柩は自動車に移され、清浦委員長、喪主伊三郎氏以下家族近親者葬儀係各自動車に分乗して、二個中隊の儀仗騎兵に護られ、棺側には横道、国司各陸軍少将、三好騎兵大佐、林同少佐随従、大手町憲兵隊司令部角を濠端に出で、文部省前九段坂下から順路市民の黙送裡に江戸川橋から一筋に音羽護国寺に向ふ。午後二時半過ぎ、霊柩が霊域に到着するや、清浦委員長初め葬儀掛り着席、白丁は霊柩を□前に安置し、続いて墓誌銘と共に□に斂め、喪主伊三郎氏を初め家族親族特別縁故者の手で柩は土深く掩はれ、直に「故議定官枢密院議長元帥陸軍大将公爵山縣有朋之墓」と墨痕鮮かに記された大墓標が立てられる。其間にも一対の燈籠を立て燈を点じ、次で神饌を供へ、大鳥齋主葬詞を白し、喪主家族以下最後の礼拝を終り、暮靄漸く深く、茲に埋葬の儀式は終る。時に七時。

「柩車は肅々と行く、両師団の士卒に護られて

日比谷の山縣公国葬 沿道に溢る、群衆の波」

哀しき最後の通夜は伊三郎氏以下親近者、葬儀委員、縁故者等に依つて行はれ、雨の夜は故らに打ち湿りて九日となった。午前六時半、大島、平田正副齋主以下、各祭官出仕して装飾し、同七時喪主伊三郎氏、同夫人以下近親者、清浦、三土正副委員長以下、各葬儀委員着床、奏楽中に神饌を奠し、大島齋主は靈前に恭しく祭詞を白す。終つて喪主伊三郎氏を始め家族親族以下葬儀委員拜礼玉串を捧げ、再び奏楽裡に神饌を撤し各退下、茲に発柩祭を終り、愈靈柩発引の準備に取り掛つた。

斯くて午前八時前後に棺側侍列の元帥大将、顧問官等自動車を乗り着け、一方大井陸海軍儀仗兵、諸兵指揮官の指揮せる近衛、第一両師団各隊の半数は蔵相邸から霞ヶ関外務省角を右に曲り、更に左折して齋場に達する沿道にギツシリと隙間もなく堵列し、外務省脇には士官学校、幼年学校生徒が行儀よく列んだ。葬送の民衆は早朝から昨夜の雨の泥濘を物ともせず、続々と其背後に集つて来る。警官は声を嗶らして忙しげに整理する。一般葬儀送列者は早くより文部大臣官舎及び永田町小学校に参集し、発柩を待ちつゝ、ある。朝来晴れるかと思へば曇り、曇るかと思へば雲が断れて、如月の悲しげな薄い光りが空中に降り懸る。

靈柩出づ 形見の大礼服

纏て午前八時四十分、悲調を帯びた一声の喇叭吹奏せらるゝや、山縣公の靈柩は国葬事務所蔵相官邸の奥の間から近衛の卒十人の手で玄関に運び出された。重い浅黄無地の輪子に蔽われた白木の靈柩の上には、公が一世の栄達を物語る元帥の大礼服と軍帽が朝曇りの裡に鈍く光る外は何の装飾もない。運ばれた靈柩は静かにワニス塗りの真新しい砲車に遷される。

其後に続いて奥元帥が暗然として出る。泣出しさうな顔をした田中義一大将が礼帽を抱へて砲車に寄添ふ。山梨陸

相、島村、松川、加藤（定吉）、柴、川村、山下、有馬、大庭、大島の各陸海大将が脱帽して階段を降りる。いづれも棺側に添ふ人々である。清浦枢密院議長、有松、一木、井上（勝之助）、曾我の各枢密顧問官、西園寺、下條両式部官が続く。孰れも最高の金ピカ大礼服である。

同五十分、靈柩を載せた砲車は前後二十二人の兵卒が黒麻の繩を採つて静々と軋り出した。砲車の前には、公が遺愛の軍馬が黒布に覆はれて今は亡き主の最後の門出に随ふのは哀れ深い。

藁沓重き喪服の伊三郎氏

折柄參謀本部前で打出す十九発の弔砲股々として響き渡り、官邸の側からは軍楽隊の「哀みの極」が流れて来る。病余の体軀を狩衣姿に悄然とした嗣子伊三郎氏が、藁沓の足取りも重く、官邸の塀に添うて居並ぶ山縣家の家従、召使達の喪服姿に打慚れた様も人目を惹いた。

斯くて靈柩は数十旒の銘旗、両陛下、摂政宮殿下御下賜の真榭、数多くの勲章と共に前後を海軍の儀仗兵に衛られて、日比谷の葬場へと向ひ、九時五分葬列の先駆は外務省の角を曲つた。

泥濘の路を軋る柩車の轍の音は重く、民衆の胸を撲つた。会葬者に交つて外国武官の服装が一層人目を惹き、大井、西川両將軍の指揮刀は映ゆく光つた。折柄懸念された空はカラリと晴れた。

人海嘯の斎場前 葬列は静に式場に消えた

一方日比谷の周囲には泥濘の中を数百の警官が引つきりなしに右往左往する。其間を馬上高く指揮官が疾駆し、何やら盛んに指揮する。今日の国葬儀の警戒である。愛国生命保険会社前から内幸町停留所に至る両側は、大繩で割り、群衆の溢れるのを堰いて居る。公を偲ぶ人、今日の国葬儀を見落すまいと数知れぬ群衆が盛に電車から吐出され、公園の周囲に蝟集する。

鯨幕の幄舎が建てられた幸門には、多数の憲兵警官が參列者外は一人も入れまいと物々しく睨んでゐる。群衆は刻々日比谷を取り囲んで、日比谷交叉点から内幸町の両側へぎつしり詰寄せて押すな押すな混雑だ。内幸町から外務省

に通ずる大道は、輜重、砲兵、歩兵の各一個大隊が右側に、海軍が左側に所剩さず整然と堵列し、司法省裏通りには道一杯に自動車^{自動車}が置かれてある。

斯うした騒々しい群集の中を、喧ましい爆音をたて、自動車^{自動車}が疾駆し、大礼服美々しい文武官が齋場内に消えて行く。靈柩出發間際の九時前十分、最早幸町附近の混雑は名状し難い。工事中の帝国ホテルの柵に攀ち登る人、帽子を脱れと叫ぶ人、押すのは誰だと血眼の警官。斯て九時電車はパツと止まつた。

午前九時半、楽の音悲しく人の胸を衝いて、近衛騎兵徒歩の儀仗が到着した。「脱帽」の聲が忽ち起る。群集は斉しく頭を垂れる。蜒蜿と続く儀仗兵の後方に、小田原から上京した青年団の白丁が静かに通る。喪主の悲しげな顔、可憐な新男爵有光氏の姿が見える。

多数の元帥、大将等に擁せられて、公の靈柩は徐々と過ぎる頃、湿やかな気は一面に漲つて、歎歎する者、眼を屢叩く老人、三十分に余る葬列が公園内に消入るや、一隊の群集はドツと電車通りに溢れ出た。「素破」と警官隊が七花八裂て制止する。海嘯のやうな混雑だ。一方警視庁前の壕端から大手町附近迄電車の両側には、数万の群衆刻々増加し、午後一時の發柩を待つ。日比谷交叉点では、交通整理の警官が汗だくで手を挙げ下げする。

金繕^{きんせう}に埋まる式場

翻つて、式場には雲を漏れる射光が正門を描く白布の大鳥居に映発して、清く敷詰めた多摩川砂利も打湿り勝ちである。鯨幕で囲んだ大天幕張りの幄舎二棟、長く両側に建ち並び、正面に建つ白木造り柿皮葺の齋場は同じく鯨幕で鎖され、各宮家、国務大臣、枢密顧問官を始め二百余対の真榊、花環、花束は齋場の周囲を所狭きまでに取巻いてゐる。勅使黒田侍従、皇后宮御使三條主事、東宮御使本田侍従、閑院、梨本、山階、華頂各宮殿下、李王世子殿下を始め奉り、先着の文武百官は大礼服の胸を輝やかせて続々参入し、幄舎の内外は時ならぬ黄金の林を造る。午前九時半、悲調の奏樂が遙か正門の外から湧いた。

此時「動一等……」と式場係りの聲が聞えて、高等官一等から公、侯爵、従二位、錦鶏間祇候と宮中席次の爵位勳等が式場着席の順に呼び上げられた。「勅任扱ひ外国人」の呼声が聞えた時は、何処かに失笑が湧いて緊張した辺が

一寸打寛ろいだ。

劍把を握った井上元帥、田所貴族院議長、横田長官、木下鉄道勅参等が夫々着席して行く。四間に十八間の幄舎二棟は一万の参列者を入れる為に設けられたものだといふが、実際の数は二棟で一千にも満たず、雨に濡れた淨白な腰掛はガラ空きであった。唯見る参列者の席は将星の綺羅びやかな礼装に埋まれて、今日は軍国の花が一時に咲き揃った様である。

最前列には東郷元帥が深い沈黙の口を神経的に顫はし、高橋首相と内田外相、山本農相、床次内相等が打列んで静かに控へた後に、中橋文相は野田通相の巨きい頭の上に囁やいて微笑してゐた。後藤市長の鼻眼鏡、加藤総裁の顔も見えた。

壮嚴を極めた祭儀 栄誉を語る勲章を正面に

「気を付け」の喇叭が続いて起る。靈柩は斎場に着いたのである。雑色の持つ白旗八旒、鉾楯二対、大鳥齋主、平田副齋主等を先頭に、「議定官枢密院議長元帥陸軍大将従一位大勲位功一級公爵山縣有朋之柩」と記き流した一旒の銘旗と共に、靈柩は砲車の軋り静かに斎場幔門内に入った。楽師の道楽が一しきり続く。参列者は斉しく襟を正して目礼する。

竹杖を持つ喪主伊三郎子、黒の喪服を纏った同夫人、船越男夫人、狩衣姿の古口家令、正装の吉江副官等の近親家族席の中には、看護婦等の打沈んだ顔も交る。清浦葬儀委員長、三土副委員長其他の委員、勅使、皇后宮御使、東宮御使、各皇族王族御使の着床、斎場の幔門は奏楽裏に開かれた。

打ち見れば、正面に安置された浅葱色で掩はれた靈柩の上には、元帥陸軍大将の正帽、正装、軍刀を置き、其前には菊花章頸飾、大勲位菊花大綬章、勲一等旭日桐花大綬章、功一級金鷄勲章を始め、英国メリツト勲章、仏国レジオルノード第一等勲章等、故元帥の偉勲を誇り額に飾られてある。斯くて式は奏楽献饌の儀を以て始まり、大鳥齋主恭しく神前に進み、悲痛の声調を罩めて祭詞を白す。門外儀仗隊は三度び軍樂を奏し殷々たる十九発の弔砲続いて帝都の空に鳴り互る。

平田副齋主代つて故公爵の偉績を頌し、勅使皇后宮東宮皇族□主の順で、参列諸員一同礼拝の玉串を捧げ、午前十一時滞りなく式を閉ぢた。斯くて伊三郎氏夫妻親族が最後に静々と齋場を退くと、直ぐ予定の十二時を三十分早めて一般の拝礼を許した。一般と言つても特に山縣家から入場券を送つたもの許りで、山縣公が狂介の昔から元帥と時めく迄の友人、或は世話になつた書生、下女の家の子郎党で七千枚を出したと云ふが、地方にも渡つて居る故もあらう、約七百人許参拝して居た。

埋葬式 靈柩は護国寺へ

午後一時、松本楼に休憩して居た山縣家家族一同は数台の自動車で先発すると、直ぐ上原陸軍少佐の指揮で柩は柩車に移され、清浦委員長、喪主伊三郎氏以下自動車に分乗し、二個中隊の儀仗騎兵に護られ、柩側には横道、国司各陸軍少将、三好騎兵大佐、林同少佐追隨の下に、大手町憲兵隊司令部角を濠端に出て、文部省前九段坂下から順路市民の目送裡に江戸川橋から一筋に音羽護国寺に向つた。

午後二時半過ぎ、靈柩の同寺に到着するや清浦委員長を始め葬儀掛着席、白丁は靈柩を□前に安置し、続いて墓誌銘と共に□に納め、喪主伊三郎氏を始め、家族親族特別縁故者の手で柩は土深く掩われ、直に「故議定官柩密院議長元帥陸軍大将公爵山縣有朋之墓」と墨痕鮮かに記された大墓標が建てられる。其間にも一基の灯籠を建て火を点じ、次で神饌を供え、大島齋主埋葬詞を白し、喪主家族最後の礼拝を了る。暮靄漸く深く埋葬の儀式を了るのは九日午後七時である（東京電話）。

史料四 『東京日日新聞』一九二二年二月十日(金) 七面

「山縣公のお葬儀に私も参列するの記」

大隈侯は国民葬——きのふは『民』抜きの『国葬』で幄舎の中はガランドウの寂しき

麹町永田町大蔵大臣官邸では、九日午前六時半から発柩祭の儀があつて、午前八時半愈々発柩となり、親族召使等の婦人連が別れを惜む間もなく、喇叭の音と共に十町に余る長い葬列が行進を始めた。海軍軍楽隊は「哀の曲」を吹奏しつゝ行く。白旗、饌□、其他は型の如く、各宮家下賜の真榭二十対ばかりの後から、両陛下、摂政宮殿下御下賜の真榭は四人の仕丁に担がれて行く。仕丁は総て古稀庵に近い板橋村小田原町の在郷軍人青年団員等特志の人々のみ百四十名が勤めた。霊柩砲車は廿名の兵士に挽かれ、棺側には奥、川村両元帥を始め、山梨陸相、松川、柴、大庭、田中、大島、加藤、名和、有馬の各陸海軍大将、其他の文武高官が侍する。霊柩の後からは故公が先帝陛下から賜はつた愛馬「花園」が寂しげに曳かれ行く。喪主伊三郎氏、船越男、有光男其他の近親主治医等が黙々と随ふ。清浦葬儀委員長以下の委員に次で、大勲位親任官、特別縁故者の一団、後藤市長、大岡育造氏等の大礼服姿、各外団武官等のケバケバしい服装が続いた。

私は身をすくめて幄舎の中を歩いた。寒いはかりぢや無い、神田の古着屋で借りた燕尾服が我れながら噴飯す程滑稽な格好だから。総ての儀式が簡略になつた今日、斯んな変な服は先づ不必要たらうと思つてゐた矢先、国葬委員より「燕尾服着用の事」などと厳達されたのだから、間違付いたの何の、白いネクタイを逆さに付けて受付の憲兵に笑はれたやうな訳。斯うした感じは私のみではない。田所勅選、山田神杜局長、永田青嵐、前田多門両助役なぞの一団からも盛に口をつけて出た。塚本局長自分の位階服を眺めて「文化はやり此の服装は何といふ非文化だらう、美術眼から見ても零だね」とセ、ラ笑ふ。田所勅選それを受けて「全くさうや、ズツと昔だからこんな服制も定められたのぢやが今日では逆も逆も」と合槌を打つ。前田助役、高級の青嵐居士を見上げて「あんた勅選の位階服を新調したさうぢやないか、ほんとかな」と皮肉る、と青嵐居士二寸間の悪い顔して、「それがナ、何うもハ、、、僕が勅

選になつた年、開院式に燕尾で登院すると貴族院の役人が「その服装では他の手前もあるから御遠慮を」ときめつけられたぢやハ、、、それでマア職務の上拵へたやうな次第でなハ、、、と身を揺らして笑ふ。多門助役が只一ツブラ下げた桐葉章から問題の「日獨戦濫賞」に及んで又一頻り大笑ひ。

軍帽に芒の穂のやうなのを押立てた佐官尉官の渦の中に、石黒枢府議員が勲一等の位階服を着た誰やらと炬を囲んでひそひそ話し、お互にうなづき合つて「さうともさうとも、仏になつたものには人間界の制裁はせぬ事ぢやて」と石黒老腕を拱く。片方の幄舎を覗くと横田法制局長官、望月前勅参なぞの金ピカが下院陣笠連の黒い渦の中に光つてゐる。あちらの一隅に井上元帥が着ぶくれて、千紫萬紅の坊主や神主の中に異彩を放つ。

大臣連は葬場の側にかたまつて、大塊遁相〔野田卯太郎〕の光つた頭に鈍い日がさして居ると、布袋首相〔高橋是清〕の幅つたい体が眼を惹く。その中に日比谷門あたりで喇叭の音が響いて葬列は白木の門から入つて来た。白い六旒の旗の後から鈍色の列が少時続いた、黒塗の砲車に乗せた柩の前に長い銘旗が垂れて行く。「故議定官」から「……之柩」までの文字を数へて見ると合計三十二文字、字あまりの歌が一ツ出来る程の長さだ。後藤市長〔後藤新平〕と大岡硯海〔大岡育造〕老を遣り過した処で、葬儀係はピタリと後の金ピカ連を止めて「左右の幄舎へ」と手で知らせる。葬場の鯨幕が開かれると柩を砲車から下して正面に据ゑ、盛り沢山の勲章を其の前に並べた。白い旗や鉾、楯なぞが左右に立つ。午前十時前、冷たい風が鯨幕の裾を吹いて外套なしの身を切るやうだ。混合つて居ればさうでもあるまいが、広い幄舎はがらんとして、長く幾重にも設けた白布掩の腰掛は雪かとばかり、天井も白布で張つてあるので猶更寒い。夫にしても国家の元勳の葬りの日、国民の為すべき事かは、帝国議會でも協賛した国葬だのにこの淋しさつめたさは一体どうした事だ。上下両院議員はホンの数へるばかり、実業家の顔は松方五郎君位のもので他は見かけない。一番端の府市名誉職の席も空々寂々で、武と文の大粒なところと軍人の群で国葬らしい気分は少しもせず、全く官葬か軍葬の観がある。突然、砲の音がした。お昼には早い、不思議に思つてゐると続いて又鳴り響いた。弔砲！さうだ弔砲だと気付いたとき、葬場の彼方から微に笙の音が聞えて来て、六人の祭官が海のもの山のものを三宝に乗つけて渡し合つてゐるのが見えた。

皆なに倣つて起立すると、年寄りの祭官が柩前に鯨固張つて何か白し始めた。それが終ると、今度は前のより少し

若い祭官が大臣席と皇族席にお辞儀をしてから、弁慶上使と云つた形で巻物をひろげた。又復起立、長い長い腰のふらつく程長い読みものだ。真正面に日を受けた閑院、梨本、李王世子其他の皆様方が微動たも為し給はずに居られるのがお気の毒でならぬ。ツツと後だからよくは聞えぬが、「維新の際」とか、「二十七八年戦役」「二十七八年戦役」などで、国の大事を連発してゐる所を見ると、故人の勲功を並べてゐるのらしい。それが終ると今度は起立の連発だ。謹嚴の塊のやうな人が葬儀委員に崇められながら柩の前に柩を供へて去る。砂利を敷いた長い通路を新兵の「足踏み」のやうな調子で帰る姿は何となく気品がある。さうだらう、常に雲の上にある黒田長敬子だの三條公輝男なぞだから——
 貴い人偉い人が柩を供へてから各国の大公使が妙な手つきで供へた。副齋主が誄詞を読んでゐる最中、代議士福井三郎君が席を立つて洋杖を振り乍ら退散したのを思ひ出して、勲一等処が柩を供へだした頃お去ばをした。勲一等〓〓私ハソレを思ひ出して独りクスクス笑つた。葬儀委員が幄舎に入つた連中の席を定めるとき、紙製の大きな喇叭で「勲一等の方！」と途轍も無い大きな声で呼びあげた。すると其の後から奈良東宮武官長、阪谷芳郎男、田尻稻次郎子と云つた人達が揀つたい顔して続き、次は「勅任官の方！」とやられたとき横田法制局長官を真先にぞろりぞろり、次は「麝香間祇候の方！」から宮中席次に依り、各階級を経てドン尻の判任待遇の中に私達を加へられた事を想つて最うたまらなく笑ひたかつた。新聞紙を詰めても尚ゆるい絹帽を押へ乍ら、門を振りかへつて同じ場所で行はれた「不老長春」のやうな大隈侯の華華しく盛んであつた国民葬を想ひ、「寒鴉枯木」のやうな此寂しい民ぬきの国葬を眺めて、何と云つていゝか判らぬ氣持になつた（三日月生）

音羽護国寺に埋葬を終る 本職以上と好評の大島さんの齋主振

午後一時、護国寺内の通行を止めた広い境内はガラシとして居る。二時五騎の騎馬巡査が勢よく門内に入ると、儀仗兵に次いで靈柩自動車が門内石段に着した。先着の伊三郎氏以下の遺族、清浦委員長、田中、大庭各大将、尾野陸軍次官等、金ピカ連に迎へられて今度新たに山縣家に購入された護国寺の裏手、大隈さんの処から約七十間、先夫人の眠る旧山縣家墓地から約八十間隔てられた百坪程の墓所に運ばれる。憲兵と警官が二間置き位に佇立して物々しい警戒。参列者は貴族を除いてはピカ連タツタ四十名許りで至つて淋しい。それに軍人は陸軍許りで海軍は一人もゐな

い。大隈さんの墓守早大生五六名が「毎日百余名の参拝者が絶えぬのには今日は交通止めだ」と呆れ顔である。霊柩が太い綱で壙所に下りると、五十貫もあらうと言ふ石蓋が設けられ、「枢密院議長元帥陸軍大将樹一位大勲位功一級公爵山縣有朋之墓」と言ふ長い墓碑が建てられた。サアベルから齋主に早変わりした大島大将、水色の衣に藁沓、鼻目鏡を掛けて悲しげに祭文を奏する。一箇小隊の儀仗兵が突如式場内に進んで喇叭を吹くと、喪主伊三郎氏、隆子夫人、令息辰吉氏、船越男などの拝礼があつて、五時式が終つた伊三郎氏は「大島さんの齋主は本職以上だ、笏を上げる時の恰好は……之だ……」と腹から扇子を二三度突出してゐた。門前は群衆で賑つてゐた。

国葬の市中

▽昨日の国葬には浅草六区の活動も芝居も、悉く「山縣公国葬に付き弔意を表し午前中休業正午十二時開館仕候」との立看板を立て、正午から一斉にブカブカドンドン。
▽弔旗を掲げて居る家は大通りにも殆ど無かつた。弔旗を立てると却つて眼につく位。

〔二〇二三年九月十九日、エリザベス女王国葬の晩に摺筆〕